資料５

復興新ビジョン検討にあたっての基本方向について

各分科会における検討の前提条件となる、研究会としての
基本的な考え方･方向性について確認をお願いします

基本方向１ 集落再建の考え方	**被災前に戻す復旧型と、適地への集落移転を組み合わせた「ハイブリッド型」とする** （第1回全体会議における検討結果より）

①被害が比較的軽微で、地すべり等に関する安全性も確認された集落は、可能な限りその場所（被災前の場所）での復旧･再建を進める

②被害が甚大で、被災前への復元や安全性の確保が困難な集落については、それぞれの集落近辺の適地に移転し再建を行う。

③安全性が早期に確保され、ある程度の広さを持つ適地はそれほど多くないことから、複数の集落が1つに集まって合同集落を形成することも想定する

④早期に帰村するために、一度仮の場所に仮設住宅を設置して戻り、安全が確認された段階で、再移転するという方法も検討する

基本方向２ 検討する復興期間	１０年程度を視野に入れた復興・再建のスケジュール（ロードマップ）を設定・提示する

①集落間の被災状況や安全性に差があり、帰村や集落･生活再建のプロセスも、条件が整ったところから段階的に進める（分散帰村）という考え方に立つ。

②各種制度の期限（仮設住宅 2年）等を視野に入れつつ、帰村や再建にあわせた集中的な基盤整備や、制度等を検討･提案していく。

③段階ごとの目標とそのための計画･活動を明確にすることで、分かりやすい復興と再建のシナリオ（プロセス）を構築･提言していく。

山古志復興新ビジョン研究会　第1回産業･経済再生分科会

基本方向３ ビジョンの 検討視点	「山古志の暮らしやライフスタイルを再生する」ことを基本視点とする

①「山でなら暮らせる」「山でしか暮らせない」という、中山間地特有の暮らし方やライフスタイル（農を中心とした自給自足型の複合的生活）を再生することを目標とする。

→自然とともに生きる「山の暮らし」の再生をめざす

②今は「村に戻る」ことが目標になっており、その先の生活について考えられない状態。研究会において、帰村まで及び帰村後の生活･産業、そのための基盤を提言することで、将来の暮らしへの希望を形成していく。

③安全性を最優先しつつ、個人の自主的な再建意欲や行動を最大限尊重する。そうした意欲や行動を引き出したり、サポートする計画･ビジョンとする。

基本方向４ 中間報告の 取りまとめ	３月上旬の中間報告では、 復興の考え方とプロセス、イメージを明確に提示する

①この間のヒアリングでは早期帰村を望む住民の声は強く、この期待に応えていく必要がある

→展望がないまま毎日を過ごすことのストレスは大きく、再建意欲を損なう恐れもある

②4月の合併を目前に、3月の議会が村としての最後の意思決定の機会となる。このタイミングで新ビジョン研の提案が採択されることを目指す

→地図上に復興のプロセスを描いて示せる程度の具体性と実現性が求められる
（ビジョンを数枚の「絵」に集約できれば、分かりやすさや伝わりやすさが高まる）

③県や国等は山古志からの要望や計画を待っている状態。早期に計画や要望を提示すれば実現しやすい環境にある

→今は予算枠があるが、4月になればその枠は確実に減少する

（想定される中間報告の目次構成案）

①山古志（村）復興の基本的な考え方

- 被災状況の概略と課題（基盤、産業・経済、生活の各分野別）
- 山古志（村）復興の持つ意味（日本の被害復興のモデルとして）
- 山古志（村）復興新ビジョン策定の考え方と視点

→各種資料、村民アンケートの結果等を活用・紹介

②山古志復興新ビジョン（案）

1）山古志復興の基本方向・コンセプト

- 集落再建の考え方・方針
- 復興にあたっての前提・基本原則（安全を最優先する　等）
- 復興によって実現する「新・山古志」の将来の姿（地域イメージ）

2）復興に向けての基本スケジュール（ロードマップ）

- 進めるべき時期と目標の提示（復興のシナリオ）
- ロードマップの実現に向けて必要となる取り組み・課題（分科会ごとに）

3）復興に向けての計画と活動

- 各分野別の復興計画（ロードマップに即した分野ごとの復興のシナリオ）
- 復興を推進するための具体的な取り組みや活動案
（制度の見直しや新たな政策の提言、住民への提案、各種アイデア　等）

※最終案では3）の「復興に向けての計画と活動」に関して、各種シミュレーション、方策やプロセスを明示するが、中間報告では骨子の紹介までとする。